

静岡英和学院大学における観光教育の展開過程

：静岡県における観光系大学の発祥年度の特定

横 関 隆 登

静岡英和学院大学観光地域デザインメジャー専任講師

1. はじめに

全国に幾多の観光に関する高等教育機関、すなわち観光系大学がある。この観光系大学は、平たく言うと高等教育機関における観光学部・学科が対象になる場合があるが、実態に即せば「観光に関する学部・学科・専攻が配置された大学」と定義できる。この定義は、国内の観光教育機関を過不足なく説明できる整合性があると思われ¹⁾、その例として国内最大級の観光教育機関であり国内の観光教育機関の道標ともいえる立教大学のあゆみを参照すると、科目レベルでの取り組みを基盤に、専攻から学科、学部へと展開したことがうかがい知れるとおりに、その証左となるのである^{2), 3), 4)}。

さて、観光系大学は、どのようにして地域に普及したのだろうか。観光系大学が一定の地位を確立した出来事といえば、1998年度に立教大学観光学部の発祥が思い起こされる。そしてこの後の2000年以降に多くの観光系大学が誕生した。この2000年以降に増加した観光系大学の特徴といえば、私立大学が大半を占め、国公立大学では僅かにすぎないことが指摘できる。特に大半を占めた私立大学は、同時期に開学した新興の私立大学が多い。つまり、新興私立大学が開学のアピールポイントとして観光学を導入した動きによって観光学は全国各地へと展開したのであり、現在からみると新興私立大学が観光学の全国展開に果たした役割があったといえよう。

このような流れの要因をさらに遡ってみると、1995年に政府の観光政策審議会が観光学の振興を謳うこととなる答申「今後の観光政策の基本的な方向について（答申第39号）」⁵⁾が思い出され、1998年に観光学部を設置した立教大学は少なからずこれに影響を受けたと推察できる。2000年代からの動きの背景には政府の意図と先駆的大学の動きが一致したと見られる1995年から1998年にかけてを起点に置くべきである。1990年代とは、明らかに観光学の振興における動きのあった時期であり、重要な意味を持つと位置付けてもいいだろう。このように国内の観光学の振興は、少なく見積もっても20年間というまとまった蓄積があるといえ、これまでの取り組みについて振り返る時期に達してきたのである。これまでの観光教育の取り組みに関する実態把握は観光研究における研究課題に位置付けても良いと考えられる。

そこで観光研究における研究課題として先に見た新興の私立大学における観光教育の実態把握を試みてみたい。新興私立大学は、ふつう組織の規模が小さく、観光教育を観光を冠した学部・学科まで組織化して取り組むよりも、人文社会科学系の学部・学科における内部組織としての専攻にて

取り組むことが多い。専攻という組織の重要な特徴は、ガバナンスに脆弱さがあることが否めないが、裏を返せば身軽さが利点でもある。観光学のコンセプトを学部・学科に反映することが難しい大学では、結果的には専攻が採用され重宝されている。こうした専攻が観光教育を担うことが顕著な地域は静岡県である。静岡県は静岡英和学院大学（以下、適宜英和学院とする）が観光の専攻を整えた唯一の観光系大学であり、かつこの先2019年度以降に公立の2大学で観光の専攻を整えた観光教育が開始される予定である。このため、観光研究にとって有益なものとなると考えられる英和学院の観光教育史を、1995年度以降から検証することとした。

本稿は、静岡英和学院大学を対象に、1995から2018年度までの観光教育の展開過程を明らかにすることを目的とした。なお、静岡県内のローカルな課題として、県内の観光系大学の発祥がいつであるのかといった基本的な整理がされずに現在に至るため、副次的な目的に静岡県における観光系大学の発祥年度の特定を位置付けた。検証の着目点として観光系大学にて観光教育が取り組まれる状況とは、観光に関わる大学の組織の下で観光科目の開設と担当する教員がいる状況があるものと想定した。

2. 方法

対象とした静岡英和学院大学（表-1）は、静岡県静岡市駿河区池田に位置する共学の4年制大学である。2002年度に同校は開学したが、開学以前の地には1966年度以降から女子短大である静岡英和女学院短期大学（以下、適宜女短大）があった。つまり女短大の経営基盤を用いて開学した大学が英和学院なのである。このために本稿が行う検証の範囲は女短大を含めることとした。なお、英和学院が開学した2002年度には女短大が解消されたが、短期大学部も開学した（以下、適宜英和短大）。このために本稿の検証の範囲は英和短大の開学後5年度間を参考として含めることとした。さらに女短大では1990年度以降に英文学科、国文学科、国際教養学科、食物学科の4学科制をとり、英和短大では、開学時から一貫して現代コミュニケーション学科と食物学科の2学科制をとっており、英和学院の学部・学科は、開学時から一貫して人間社会学部の1学部、人間社会学科とコミュニティ福祉学科（地域福祉学科からの改称）からなる2学科制をとっている。予備調査により、英和学院人間社会学科は専攻組織が変遷していることがわかり、かつその動きが取りまとめられてはいないことがわかった。このため本稿では英和学院人間社会学科における専攻機能の変遷を整理することとした。

これらの検証は、対象とした組織が発行した資料を参照することで実現可能と判断し、英和学院が保管する資料を全て収集することとした。収集した資料は、教育の拠り所とな

表-1 静岡英和学院大学の沿革

年度	内 容
1887	静岡市西草深に静岡女学校を創立
1903	校名を静岡英和女学校に改称
1950	学校法人静岡英和女学院に改組
1966	静岡市池田山に静岡英和女学院短期大学(英文科、国文科)を開学
1969	静岡英和女学院短期大学英文科、国文科を英文学科、国文学科と改称、食物学科開設
1972	静岡英和女学院短期大学に専攻科英文学専攻、専攻科国文学専攻を開設
1990	静岡英和女学院短期大学に国際教養学科を開設
2002	静岡英和女学院短期大学(国文学科、英文科、国際教養学科、食物学科)をもとに、静岡英和学院大学(人間社会学部人間社会学科、地域福祉学科を設置)ならびに静岡英和学院大学短期大学部(現代コミュニケーション学科、食物学科)の開設
2011	静岡英和学院大学の「地域福祉学科」を「コミュニティ福祉学科」に名称変更
2016	学校法人名を「静岡英和学院」に改称
静岡英和学院大学（2017）：平成29年度 大学機関別認証評価 自己点検評価書：静岡英和学院大学を基に作成	

るシラバス29点（表－2）、外部に発信するための資料となる大学案内15点（表－3）である。なお、英和学院の在籍者には観光教育の全貌を把握する者がいない。資料を解釈するための参考意見をうかがうために資料分析と併せて教職員へのインタビューを実施した。

研究構成は、3つに分けられる。最初に前史として1995から2001年度までの静岡英和女学院短期大学における観光教育の動向を明らかにした上で、次に補足として2002から2006年度までの静岡英和学院大学短期大学部における観光教育の動向を明らかにする。女短大と英和短大の観光教育は、英和学院との接続を推察するために、その内容を出来る限り詳細に論じた。最後に2002から2018年度までの静岡英和学院大学人間社会学部における観光教育の動向を明らかにした。なお、英和学院の観光教育の動向を把握する前に、英和学院の学科内の専攻に関する機能を把握・整理した。

3. 結果

（1）1995から2001年度までの静岡英和女学院短期大学における観光教育

1995から2001年度までの女短大が用いたシラバスを整理した結果、観光科目は、1998年度からの国際教養学科ならびに英文学科にて確認できた（表－4、表－5）。

国際教養学科における観光科目は1998から2001年度までに述べ4科目の開設が確認でき、開講された期間は全て2年間であった。国際教養学科における観光科目の担当教員は、専任教員が小嶋善行のみであり、ほかの堀正明、小坂総太郎、竹下拓磨、相沢伸郎は静岡県内

表-2 収集したシラバス（29点）

年	発行元	表題
1995	静岡英和女学院短期大学	1995 講義内容
1996	静岡英和女学院短期大学	1996 講義内容
1997	静岡英和女学院短期大学	1997 講義内容
1998	静岡英和女学院短期大学	1998 講義内容
1999	静岡英和女学院短期大学	1999 講義内容
2000	静岡英和女学院短期大学	2000 講義内容
2001	静岡英和女学院短期大学	2001 講義内容
2002	静岡英和学院大学短期大学部	2002 講義内容
2003	静岡英和学院大学短期大学部	2003 講義内容
2004	静岡英和学院大学短期大学部	2004 履修要項・講義内容
2005	静岡英和学院大学短期大学部	2005 履修要項・講義内容
2006	静岡英和学院大学短期大学部	2006 履修要項・講義内容
2002	静岡英和学院大学	2002 講義内容
2003	静岡英和学院大学	2003 講義内容
2004	静岡英和学院大学	2004 履修要項・講義内容
2005	静岡英和学院大学	2005 履修要項・講義内容
2006	静岡英和学院大学	2006 履修要項・講義内容
2007	静岡英和学院大学	2007 履修要項・講義内容
2008	静岡英和学院大学	2008 履修要項・講義内容
2009	静岡英和学院大学	2009 履修要項・講義内容
2010	静岡英和学院大学	2010 履修要項・講義内容
2011	静岡英和学院大学	2011 履修要項・講義内容
2012	静岡英和学院大学	2012 履修要項・講義内容
2013	静岡英和学院大学	2013 履修要項・講義内容
2014	静岡英和学院大学	2014 履修要項・講義内容
2015	静岡英和学院大学	2015 履修要項・講義内容
2016	静岡英和学院大学	2016 履修要項・講義内容
2017	静岡英和学院大学	2017 履修要項・講義内容
2018	静岡英和学院大学	2018 履修要項・講義内容

表-3 収集した大学案内（15点）

年	発行元	表題
2002	静岡英和学院大学	開学. 2002
2003	静岡英和学院大学	2003 GUIDE BOOK
2004	静岡英和学院大学	2004 GUIDE BOOK
2006	静岡英和学院大学	2006 GUIDE BOOK
2007	静岡英和学院大学	2007 Information
2008	静岡英和学院大学	2008 Information
2009	静岡英和学院大学	2009 Prospectus
2010	静岡英和学院大学	2010 Prospectus
2012	静岡英和学院大学	Shizuoka Eiwa Gakuin University 2012
2013	静岡英和学院大学	Shizuoka Eiwa Gakuin University 2013
2014	静岡英和学院大学	SHIZUOKA EIWA GAKUIN UNIVERSITY 2014
2015	静岡英和学院大学	Shizuoka Eiwa Gakuin University 2015
2016	静岡英和学院大学	Shizuoka Eiwa Gakuin University 2016
2017	静岡英和学院大学	University guide 2017
2018	静岡英和学院大学	University Guide 2018

※2005年度と2011年度は欠落。

表-4 1995から2001年度までの国際教養学科における観光科目、教員

科目	1995～97	1998	1999	2000	2001
観光社会論		堀正明	堀正明		
観光論				堀正明・小坂総太郎・竹下拓磨ほか	堀正明・小坂総太郎・竹下拓磨ほか
旅行企画演習				相沢伸郎	相沢伸郎
トラベル英会話				小嶋善行	小嶋善行
合計(全4科目)	0	1	1	3	3

表-5 1995から2001年度までの英文学科における観光科目、教員

科目	1995～97	1998	1999	2000	2001
観光英語		福島義之	福島義之	福島義之	福島義之
合計(1科目)	0	1	1	1	1

の旅行企画業ないしは宿泊業に従事する非常勤教員である。1998および1999年度に開講された「観光社会論」は社会はキーワードにされず実質的には観光論であり、座学としての概論を論じたものであった。この「観光社会論」の流れは2000から2001年度に開講された「観光論」に引き継がれ、さらには演習科目となる「旅行企画演習」の開講へと展開した。また、これらと同年に「トラベル英会話」が開講された。

一方の英文学科における観光科目およびその担当教員は非常勤教員である福島義之による「観光英語」のみであり、2001年度まで継続された。「観光英語」では科目名のとおりに観光に必要な英語教育がなされた。

女短大における観光教育は、英和学院の開学前史として着目すべき時代である。1998年度に両学科にて同時に観光科目が登場したことは、女短大にて観光への関心が芽生えたからであると指摘できる。1998から1999年度までには英文学科が専任教員が主導して観光科目の開設に着手し、国際教養学科では非常勤教員による試行的な観光科目の導入を図ったといえる。この2年間の観光科目に対する評判が良好であったゆえに2000から2001年度に国際教養学科にて観光科目の展開がなされたと考えられた。こうした女短大における取り組みを[女短大科目時代]と呼ぶこととする。なお、女短大に観光科目が開設されていたことは、後に明らかにする英和学院の開設に影響を与えている可能性を示唆することができる。

（2）2002から2006年度までの静岡英和学院大学短期大学部における観光教育

英和学院開学以後の短期大学教育における観光科目の取り扱いを把握するために、便宜的に2002から2006年度までの5年間の英和短大が用いたシラバスを整理した結果、観光科目は、確認した全範囲の現代コミュニケーション学科にて述べ3科目の開設を確認した（表－6）。

2002および2003年度には、女短大から続く非常勤教員である小坂総太郎、竹下拓磨、堀正明による「世界の観光地誌」のみが開講され、観光資源について講じられた。これに加えるかたちで2004年度以降には「観光英語」が開講され、女短大から続く専任教員である小嶋善行が初年度のみ担当し、それ以降から非常勤教員である柴田ひさ子が担当した。そして2006年度には、「世界の観光地誌」が廃止されるが、この流れはそのまま新設科目である「日本の観光地誌」に引き継がれ、論点を世界から日本国内へと修正した。

本稿では、英和学院における観光教育の起源と変遷の解明を行うことを目的に位置付けたため、英和短大における観光教育の総括は留保したいが、こうした英和短大での観光科目の動向は、女学院との接続、英和学院の特徴の認識の

ために着目すべきところがある。女学院時代における観光科目は、のべ4科目、同一年度において最大で3科目が開設されていたが、英和短大では、のべ3科目、同一年度において最大で2科目の開設へと縮小した傾向をうかが

表-6 2002年から2006年までの現代コミュニケーション学科における観光科目、教員

科目	2002	2003	2004	2005	2006	2007～
世界の観光地誌	小坂総太郎 ・竹下拓磨 ・堀正明	小坂総太郎 ・堀正明	小坂総太郎 ・堀正明	堀正明・ 小坂総太郎		(未調査)
観光英語			小嶋善行	柴田ひさ子	柴田ひさ子	
日本の観光地誌					小坂総太郎 ・堀正明	
合計(全3科目)	1	1	2	2	2	

い知れた。また、女学院時代との接続が最も大きいはずの2002および2003年度には非常勤教員による1科目の開講に留まっているため、両者の接続はあるものの大きくはなかったと見られる。すなわち、女学院時代における観光科目の実績は、一部が英和短大に引継がれたが、完全に引継がれたとは考えられず、その残りの業績の行方は、英和学院に配分されたとの仮説が成り立つのである。

(3) 2002から2018年度までの静岡英和学院大学人間社会学部における観光教育

1) 人間社会学部における専攻機能の変遷

2002から2018年度までの学校案内を基に人間社会学科における専攻組織を確認したところ、区分は4度移り変わった(表-7)。

2002から2005年度までの専攻組織は、「心理コース」「文学・文化コース」「国際関係コース」「経済・金融・経営コース」を単位に教育と運営がなされていた。このコースの下には副専攻が置かれ、7つに区分された。観光という名称は、コースには無く、副専攻に見られた。つまり観光教育は英和学院の開学当時に観光は副専攻として始動したといえる。

2006から2007年度までの専攻組織は、コースが改変され「心理コース」「文学・文化・観光コース」「国際政策コース」を単位に教育と運営がなされていた。このコースの下には引き続き7つに分けられた副専攻が置かれたが、一部の副専攻は改変された。観光という名称は、コースと副専攻の両方に見られた。すなわちこの時期に、観光は文学と文化と並ぶ位置付けであるものの主専攻として始動したといえる。

2008から2015年度までの専攻組織は、コースが「心理コース」「文学・文化・観光コース」「金融・経営・法学コース」へと改変され、これらの下には副専攻を解消するかたちでメジャーが置かれた。メジャーは、従来の副専攻とは異なり、学生は主専攻としてメジャーを単位に主専攻を選択した。したがって従来のコースが備えていた教育上の機能は、メジャーに移ったといえる。組織運営自体は従来のコースを単位に機能していた。

2016から2018年度までの専攻組織は、コースが系に変わり「心理系」「マネジメント系」「言語文化系」へと再編された。メジャーは系の下に置かれた。コースが備えていた組織運営機能は、メジャーに移されたため、系には実質的な機能がない。

以上の整理より、2002から2005年度までを[コース内副専攻時代]、2006から2007年度までを[コース時代]、さらに2008から2015年度までを[メジャー時代前期]、2016から2018年度までを[メジャー時代後期]と命名した。

表-7 人間社会学科における専攻機能の変遷

年	専攻機能	専攻区分	専攻細区分
2002 -2005	コース	心理コース	心理副専攻
		文学・文化コース	国際文化副専攻
		国際関係コース	日本文学副専攻
		経済・金融・経営コース	観光副専攻 経済副専攻 国際関係副専攻 社会副専攻
2006 -2007	コース	心理コース	心理副専攻
		文学・文化・観光コース	国際文化副専攻
		国際政策コース	日本文学副専攻
			観光副専攻 経済・経営副専攻 国際関係副専攻 法律・社会副専攻
2008 -2015	メジャー	心理コース	心理メジャー
		文学・文化・観光コース	英米文学・文化メジャー
		金融・経営・法学コース	日本文学・文化メジャー
			観光メジャー 金融・経済メジャー 経営メジャー 法律・社会メジャー
2016 -2018	メジャー	心理系	心理メジャー
		マネジメント系	経済経営メジャー 観光地域デザインメジャー
		言語文化系	英語文化メジャー 日本語文化メジャー

2) 人間社会学科の観光系専攻における観光科目、教員

2002から2018年度までの英和学院が用いたシラバスを整理した結果、観光科目は、2002から2018年度までの全範囲にて確認できた(表-8)。同期間での観光科目は、述べ18科目の開設を確認した。その内訳として、2002から2005年度までの[コース内副専攻時代]に述べ3科目の開設、2006から2007年度までの[コース時代]に述べ3科目の開設、2008から2015年度までの[メジャー時代前期]に述べ8科目の開設、2016から2018年度までの[メジャー時代後期]に述べ11科目の開設を確認した。こうした内訳の科目と教員の傾向は以下のとおりに整理した。

2002から2005年度までの[コース内副専攻時代]に開設された述べ3科目は、専任教員の小嶋善行と上田卓爾が担当した。小嶋善行が担当した「観光英語」は、観光に関する英語を修学する科目であり、女短大の国際教養学科で「トラベル英会話」として開講された科目である。上田卓爾が担当した「観光ビジネス事情」、「観光演習」は、ビジネスとしての観光の事情を修学する座学科目とその演習科目といった性格があり、女短大の国際教養学科で「観光論」、「旅行企画演習」として開講された科目との共通性が認められた。このように[コース内副専攻時代]に開設された述べ3科目は、女短大における観光教育からの流れを汲んだものであった。しかし女短大における観光教育と比較すると大きな改変のなかったことも特徴にあげられた。

2006から2007年度までの[コース時代]に開設された述べ3科目は、専任教員の小嶋善行、安福恵美子、非常勤教員の相沢伸郎が担当した。「観光英語」は2006年度には引き続き小嶋善行が担当しているが、2007年度には安福恵美子の担当科目に移行した。この他にも安福恵美子は、文化人類学の見地から「文化観光論」を担当した。2006年度には「観光学Ⅰ」の開講が始まり、相沢伸郎が担当した。相沢伸郎は、女短大からの観光科目担当者であるため、女短大にできた人脈がこの科目の開設にあてっての礎となったと証左された。このように[コース時代]に開設された述べ3科目は、科目の開設・改変が始まったことが特徴にあげられる。

2008から2015年度までの[メジャー時代前期]に開設された述べ8科目は、専任教員の安福恵美子、天野景太、野瀬元子、崔瑛が担当した。2008年度では、前年度に相沢伸郎が担当した「観光学Ⅰ」が天野景太に引き継がれ、さらに天野景太は観光学Ⅰに対しての「観光学Ⅱ」、および実習科目となる「観光実習Ⅰ」と「観光実習Ⅱ」、そして旧観光ビジネス事情を復活させた「観光ビジネス事情」を担当した。また、2008年度に開設された観光実習Ⅰ・Ⅱは、翌2009年度に「観光デザイン論」と「観光フィールドワーク演習」へと振り返って開設された。しかし天野景太が担当した科目は2010年度から2011年度にかけて野瀬元子に引き継がれ、こうした科目の多くが2011から2012年度にかけて崔瑛へと引き継がれた。安福恵美子は2008年度に「エコツーリズム論」を開設しているが、これを含めた安福恵美子が担当した科目は、2011から2012年度にかけて野瀬元子に引き継がれた。このように[メジャー時代前期]に開設された述べ8科目は、科目の開設が全時代から増加したことが特徴にあげられる。

2016から2018年度までの[メジャー時代後期]に開設された述べ11科目は、専任教員の野瀬元子、崔瑛、横関隆登、Harrington Patrickが担当した。科目は「観光英語」から「国際観光コミュニ

表-8 人間社会学科の観光系専攻における観光科目、教員

[illegible]

凡例 ▲はシラバスに記載されているが、未開講

(特)は科目名の変更(2006年度観光ビジネス事情から2007年度観光学Ⅰ、2016年度国際観光コミュニケーション、2016年度エコツーリズム論から2016年度観光光文化実習、2016年度観光光英語から2016年度国際観光コミュニケーション、2016年度エコツーリズム論から2016年度観光光文化実習、2016年度観光光英語から2016年度観光光文化実習、2016年度観光光文化実習から2007年度文化観光論、2009年度観光光実習Ⅰから2009年度刊行デザイン論、2016年度観光光英語から2016年度観光光文化実習)

ケーション」へ、「エコツーリズム論」から「国際観光演習」へ、さらに「観光フィールドワーク演習」から「観光学特殊講義Ⅰ」へと改変された。翌2017年度には、「国際観光コミュニケーション」が野瀬元子からHarrington Patrickに変更、崔瑛による「観光学研究法」が開講された。2018年度からは崔瑛による「観光産業特論Ⅰ」と「観光産業特論Ⅱ」が開講された。また野瀬元子が担当した科目が2018年度に横関隆登に引き継がれ、かつ横関隆登による「観光学特殊講義Ⅱ」が開講された。

4. 考察

これまでに本稿では静岡英和学院大学人間社会学部における観光教育を、その前史と想定された静岡英和女学院短期大学における観光教育および併設された静岡英和学院大学短期大学部における観光教育まで含めて検証した。この検証結果によって、英和学院の観光教育の変遷が明らかになり、さらに静岡英和女学院短期大学における観光教育から静岡英和学院大学人間社会学部における観光教育への展開が確認できた。この展開とは、女短大での観光教育は科目数の拡大傾向にあるが、英和短大での観光教育が科目数が縮小傾向にあり、英和学院では開学時から科目が位置付けられていたことにより、女短大での観光教育が、英和学院の開学へと引き継がれたと指摘できる。すなわち女短大にて科目の開設により起こった観光教育が先鞭となり、その行き先として英和学院の開学当初に見られる観光副専攻の設置に落ち着いたと考えられるのである。したがって観光教育の起源は、前史と想定した静岡英和女学院短期大学における観光教育にあるといえる。

本稿では女短大と英和学院との観光教育に接続を見出したため、女短大を起源とする見方から現在に至るまでの総括が必要となる。再びその全体像を検討した結果、全部で5期に分けられた。Ⅰ期となる1998から2001年度までの[女短大科目時代]は、観光科目の開設が見られたように英和学院の観光教育の前史に位置付けられる時代であり、《黎明前期》というキーワードによって説明できると考えられた。Ⅱ期となる2002から2005年度までの[コース内副専攻時代]は、英和学院の開学直後に設置された副専攻における観光教育がなされかつ、女短大における観光教育との接続がありながらも女短大よりも新しい取り組みがされなかった時代であり、《黎明後期》というキーワードによって説明できると考えられた。Ⅲ期となる2006から2007年度までの[コース時代]は、英和学院で初となる観光の専攻「文学・文化・観光コース」が設置され、かつ観光科目に調整が見られた時代であり、《昇格期》というキーワードによって説明できると考えられた。Ⅳ期となる2008から2015年度までの[メジャー時代前期]は、観光の専攻が「観光メジャー」として独立する名称に変更され、新しく開設された観光科目の多くが変化に富んでいたことから、《形成期》というキーワードによって説明できると考えられた。Ⅴ期となる2016から2018年度の[メジャー時代後期]は、観光の専攻が「観光地域デザインメジャー」に変更され、再び観光科目に変化が見られたことから、《再形成期》というキーワードによって説明できると考えられた。以上のような再編した総括は表にまとめることができる(表-9)。表に並べた観光教育の時代を象徴するキーワードは、検証結果となる

組織と科目、教員の変遷とも十分に馴染むことが確認できたと考えられた。英和学院における観光教育の展開過程は、この表の区分に従って十分に説明することができるため、これを結論とした。

最後に、副次的な目的に位置付けた静岡県における観光系大学の発祥年度の特定を行いたい。英和学院はどの年度から観光系大学と呼ぶことができるのだろうか。静岡英和学院大学における観光教育は、前身の静岡英和女学院短期大学を起源に数えると、1998から2018年度にわたる20年間のあゆみがある。静岡英和学院大学の観光系専攻の設置を語る上で重要と考えられる出来事を取りまとめると、以下のような年表となる。

静岡英和学院大学における観光専攻の設置に関する年表

- 1998年度 静岡英和女学院短期大学国際教養学科ならびに英文学科に観光科目の導入
- 2000年度 同短期大学国際教養学科にて観光科目の改変・増加
- 2002年度 静岡英和学院大学が開学し人間社会学部人間社会学科にてコース制ならびに副専攻制の導入、これを受けて国際関係コースならびに文学・文化コースのなかに観光副専攻の開設
- 2006年度 同大学同学部同学科のコースに文学・文化・観光コースを開設、観光副専攻の維持
- 2008年度 同大学同学部同学科の副専攻制の解消し、観光メジャーを開設、コース制の専攻機能をメジャー制へと移行
- 2016年度 同大学同学部同学科のメジャーを再編し、観光地域デザインメジャーを開設

以上の取りまとめから、英和学院は、観光系専攻「文学・文化・観光コース」の設置を見ることができる2006年度から観光系大学と呼ぶことが相応しいと言っても差し支えが無いだろう。静岡県における観光系大学の発祥年度は、2006年度と特定できた。

表-9 静岡英和学院大学における観光教育の展開過程

年 度	1998 - 2001	2002 - 2005	2006 - 2007	2008 - 2015	2016 - 2018
時 代	[女短大科目時代]	[コース内副専攻時代]	[コ ー ス 時 代]	[メジャー時代前期]	[メジャー時代後期]
展 開	I期《黎明前期》	II期《黎明後期》	III期《昇格期》	IV期《形成期》	V期《再形成期》
組 織	国際教養学科 および英文学科	文学・文化コース および国際関係コース 観光副専攻	文学・文化・観光コース 観光副専攻	文学・文化・観光コース 観光メジャー	マネジメント系 観光地域デザインメジャー
科 目	観光論 観光社会論 旅行企画演習 トラベル英会話 観光英語	観光ビジネス事情 観光演習 観光英語	観光学Ⅰ 文化観光論 観光英語	観光学Ⅰ 観光学Ⅱ 文化観光論 エコツーリズム論 観光ビジネス事情 観光デザイン論 観光デザイン論 観光フィールドワーク演習 観光英語 観光実習Ⅰ 観光実習Ⅱ	観光学Ⅰ 観光学Ⅱ 文化観光論 観光ビジネス事情 観光デザイン論 国際観光コミュニケーション 国際観光演習 観光学特殊講義Ⅰ 観光学特殊講義Ⅱ 観光学研究法 観光産業特論Ⅰ 観光産業特論Ⅱ
教 員	小嶋善行 堀正明 小坂総太郎 竹下拓磨 相沢伸郎 福島義之	上田卓爾 小嶋善行	安福恵美子 小嶋善行 相沢伸郎	安福恵美子 天野景太 野瀬元子 崔瑛	野瀬元子 崔瑛 横間隆登 Harrington Patrick

※科目と教員は時代中に減ることがあるが、本表ではこの変動を加味していない。変動の詳細については本稿の表-4と表-8を参照すること。

5. おわりに

本稿は静岡英和学院大学における観光教育の起源および変遷を明らかにすることができ、さらに静岡県における観光系大学の発祥を特定することができた。観光研究として本稿は、英和学院を通して振興の私立大学における観光教育の展開過程を明らかにしたものと位置付けられる。

冒頭で述べたように観光系大学とは、専攻も含めて学部・学科と並べた組織によって理解されるべき性格があることが多少なりにも論じることができた。観光系大学を発想する機会がある場合、直ちに観光系の学部・学科のある大学を発想するべきではなく、観光系の専攻を持つ大学までも想定し、それを含むか否か検討する態度が求められているのである。こうした観光系大学への理解を確かなものとするためには、全国各地の大学を対象に検証を進めていくことが重要になるだろう。本稿を取りまとめた経験⁶⁾から今後を展望するならば、観光系専攻を持つ大学における大学関係者による内発的なフィールドワークとそれに基づく情報公開に期待させていただきたい。

補注及び引用文献

- 1) 先行する検討は、平成21年6月16日に開催された「観光教育に関する学長・学部長等と観光庁との懇談会」での配布資料に見られる。この資料には観光教育に携わる組織を観光関連学部・学科と称した学部・学科を対象としている。しかし、この資料を見る限りでは統計から全体像を理解するための作業実行のために提出された定義と考えられる。この他に観光系大学の規定を試みた資料はなかった。
観光庁観光産業課：平成21年度観光教育に関する学長・学部長等と観光庁との懇談会・配付資料2 観光関連学部・学科のある大学一覧：<http://www.mlit.go.jp/kankocho/president.html>，最終更新日2012年10月2日
- 2) 立教大学観光学部（2018）観光学部のあゆみ：立教大学観光学部2019，7
- 3) 河合塾（2007）観光学部・学科：Guideline 2007(11)，64-70
- 4) 立教大学における観光教育は最初期の取り組みを1946年に課外での「ホテル講座」の立ち上げに認めることができ、科目レベルで経済学や文学など多様な専攻の学生に観光教育を施したとされる。そしてその実績を基盤とし、1966年には同大学社会学部産業関係学科に「ホテル・観光コース」が開設し、翌1967年には同大学同学部内にこの「ホテル・観光コース」が母体となる「観光学科」が設置され、さらに1998年には同大学内にこの「観光学科」が母体となる「観光学部」の設置へと展開したとされる。
- 5) 観光政策審議会 平成7年6月2日 今後の観光政策の基本的な方向について（答申第39号）
構成
前文
Ⅰ 観光を考える基本的視点
Ⅱ 21世紀の観光を創造するための具体的方策の提言
Ⅲ 施策の進め方
観光学の振興に関わる内容は、Ⅱ条の4項「観光大学など高等教育研究機関の設立による人材育成と観光学の振興」である。その全文は以下のとおりである。
良質の観光サービスが確保されるためには、優れた人材が不可欠である。さらに、観光の質が向上し、高い社会的評価を得るためには、観光に関する研究を深める必要がある。
このため、観光サービスの提供に関して高度な感性と適切な能力を有する人材を育成し、併せて観光に関する国内外の政策等について総合的な研究を行う観光大学のような高等教育研究機関の整備を行う。その際、観光サービスの提供が地域の文化情報の発信基地となることから、各地域においてこれらの教育・研究が行われるよう配慮するとともに、観光関係の人材を育成している他の教育機関とのネットワーク化を進める。
- 6) 筆者が対象地で実施したフィールドワークは、筆者の属性である学内関係者、教務委員という立場によって円滑に進められた。このような属性が無ければ筆者のフィールドワークは困難なものとなる。フィールドワークを実施した経緯を述べたい。そもそも筆者は、観光地域デザインメジャーにおける観光教育のあゆみを、単に学ぼうと思い立ったところがフィールドワークの出発点にある。学内の在籍者には観光地域デザインメジャーにおける観光教育のあゆみを知る者が居ないため、筆者は図書館で大学史を調べたところ、大学史にはそのような内容が収録されていないことがわかった。これがきっかけとなり筆者は本稿の執筆を思い立った。そこで

小川雅英司書に相談したところ、大学史が編纂中であるとの情報を提供いただき、かつ大学史の編纂に用いられる一次資料の紹介、授業名や担当教員名を知るためには新資料の発掘方法についての助言を頂くことができた。その上で小川雅英司書の薦めで各課の大学職員（広報課、学生課）にご協力いただき保存資料を閲覧させて頂いた。保存資料だけでも概ねの情報は整理できたが、あえて欠点を述べると保管された資料は一部の年度に欠損がみられたことである。この欠陥箇所は、資料の前後関係や関連する資料との照合を行って仮説を構築することができたが、仮説を確かなものにするために女短大からの在籍者にインタビュー調査を実施することとした。インタビュー調査には古郡康人教授が応じて下さり、こちらが用意した大小の疑問に回答を求めて確認させて頂いた。なお万が一本稿に誤りがあった場合には、インタビュアーとしての筆者の疑問の持ち方や質問の仕方の落ち度に他ならない。また多くの教員各位との雑談のなかで多くの気づきが得られた。以上のようなフィールドワークを経て本稿のデータを揃えることができた。最後に紹介した各氏、紹介しきれなかった教員各位にもお礼を申し上げさせていただく。

